

9月26日 マタイによる福音書20章 1～16節 今日の説教から  
説教題：「公平とは、不公平とは」

今日の聖書箇所では、天の国を与える神様がぶどう園の主人として、天の国へ招かれる私たちキリスト者が労働者としてたとえられています。朝早くから暑い中働いた人々に与えられる報酬と、夕方ごろに主人に連れられて働き始めた人々の報酬が同じことに、私たちは不公平だと感じることでしょう。しかし、これが「天の国」を例えたものであることによって、この不公平さの正体が理解できるようになります。

これは、私たちに与えられる救いについて例えられた言葉です。ぶどう園の主人は神さまであり、私たち労働者に報酬を与えるために、労働を用意してくれています。「天の国に入ることができる」「新しい命が与えられる」という救いは、神様から与えられる「報酬」「デナリ銀貨」という形で私たちに示されています。私たちに約束されている救いの希望は、すべての人々に平等に与えられるものであり、あとから来たか先に働いていたか、つまり信仰歴が長いかどうかに左右されるものではありません。「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」と主人が語るように、神様は私たちがなかなか信仰へと入ることができなかつたとしても、例えば人生の終わりに差し掛かってようやく神様のことを、イエス様のことを信じることができたような人に対しても、その遅くなつたことをとがめるようなことはせず、すでに信仰に入った先達と全く同じ恵みを、愛を注いでくれるのです。

逆に、彼らにおける労働、つまりは「信仰」を長く続ければ続けるほど、「日中の暑さ」に譬えられるような信仰の危機は私たちに襲い掛かります。労働の辛さに逃げ出してしまうような、先に信仰に入った私たちが日々の生活によって信仰が揺らいでしまうことによって信仰から外れた場合は、一日の終わり、最後の審きの時に私たちは報酬としての救いを与えられないかもしれません。最初から労働の機会を与えられなかつたのではなく、つまり神様を知る機会が全くなかったわけではなく、また信仰の報酬がどれだけ大きなものかを教えられているにもかかわらずそれを拒絶してしまうことは、一切労働しなかつた人よりもなお救いの報酬から遠くなってしまう可能性があります。私たちは神様のことをよく知って、欲望や誘惑のことをよく知っているからこそ気を付けなければいけません。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる」、そう弟子たちに語るイエス様の言葉が、私たちが不信仰へと向かってしまわないように支えてくれています。そして、信仰の道からそれてしまつた時にも、イエス様は私たちがまた悔い改めて信仰に戻ることができるよう支えてくれています。だからこそ、私たちは日々強められて生きることができます。

「私だけを愛してくれる神様」というものは、私たちの信仰の中にはいません。私たちの神様は、特定の民族だけを大切にする神様でもなければ、信仰者だけに手を差し伸べる神様でもありません。すべての人々に救われてほしいと願い、その為に教会を立てられました。私たちの事を深く愛しているように、神様は私たちの隣人全てのことも深く愛しています。私たちだけで独占することのできない尽きることない神様の愛が、すべての人々に向けて注がれていることを、私たちはより多くの人々に教えることを期待されています。神様に力と愛を注がれた私たちであれば、それができると神様は知っています。その喜びを胸に、今週一週間の、これから歩みを共に進めましょう。

## 今日の説教箇所：マタイによる福音書20章 1～16節

- 1:「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないので』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。
- 8:夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。
- 11:それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」